

氏 名	岡 田 幸 彦
学位の種類	博士（学術）
学位記番号	博文化甲第14号
学位授与年月日	平成22年9月17日
学位授与の要件	学位規則第3条第3項該当
学位論文題目	現代日本語の移動動詞 ー構文からみた語彙的意味と語彙体系の記述
論文審査委員	委員長 教 授 仁科 弘之 委員 教 授 小出 慶一 委員 教 授 武井 和人 委員 教 授 杉浦 晋

## 論 文 内 容 の 要 旨

### 序章

本論文では、日本語移動動詞の語彙的意味と語彙体系の記述方法の確立をめざす。

### 第一章

移動動詞と結合可能な特定の格形式\*をもつ場所名詞には、(A) 移動動詞から自立的な文法的意味\*\*をもつもの、(B) 移動動詞によってその文法的意味が決定されるもの、がある。(A) の例の[場所から/まで]は、かなり多様な移動動詞とともに用いられて運動の開始場所を表し、その開始とその後の移動は連続的、継続的に解釈される。これは格助詞の自立的な意味であり動詞本体の意味から影響を受けない。(B) の例には[場所を][場所に/へ]がある。をは、特定の動詞とともにのみ用いられ、移動が開始される場所を表す。この移動の開始、つまり出発は動詞の表す移動全体とは独立である。ここでは、動詞は[場所を]に移動の開始場所という文法的意味を与える。(評者注：\*格形式とは[場所から]の中の格助詞からのこと。格助詞を名詞の活用語尾とみため[場所から]全体を名詞と呼ぶ。場所は意味的範疇を表す。\*\*名詞と格助詞のそれぞれの意味を合成した意味のこと。)

著者は小説から抽出した例文をデータとして、場所を示す名詞と移動動詞との結合形式を以下のように定義した。

【0】[場所から]：移動の開始場所を表し、開始とその後の移動が連続的・継続的に示される。自立的に移動が開始される場所を示し、意味の矛盾がない限り移動動詞と結合可能である。

【1】[場所を]：以下の動詞と結合して、移動の開始場所あるいは移動の経由場所を表す。はなれる等は[場所を]に出発地点の意味を与える。とおる等は[場所を]に経由地点の意味特性を与える。出発や経由は動詞の表す移動過程から決定される。

【2】[場所に/へ]：以下に挙げる動詞と結合して、移動の到着部分あるいは目的地点を表す。いく等は、[場所に/へ]に到着地点の意味特性を与える。むかう等は、[場所に/へ]に目的地点の意味特性を与える。到着部分や目的地点は動詞の表す移動過程から決定される。

【3】[場所まで]：【1】の動詞類のいく、すすむ等のような終点にいたる移動を連続的・継続的に示す動詞と結合できる。しかし、動詞の意味は[場所まで]の持つ意味を決定しているわけではない。

## 第二章

一方、[方向に/へ]と移動動詞との結合は次のような2種類があると著者はいう。

【α】[方向に/へ]と結合可能な動詞の意味には、上に あがる/のぼる、外に 出でる等のように、それぞれ固有の方向性（上下、内外など）が含まれる。これらは、出発地点と到着地点が空間上で特定視点から相反する領域に属している、という共通性を持ち、同一範疇に属す。

【β】いく、すすむ、あるく等の動詞類は、[場所を]と結合可能であり、[場所を]に、経由地点という意味を与える。さらに、[場所まで]との結合も自由に許容し、[方向に/へ]とも結合可能である。しかし、経由点を要求するとおろが[場所まで]や[方向に/へ]とも結合しないことから、これらの3動詞は経由地点、連続性、継続性の特性をもつ別の類を構成する。

## 第三章

宮島(1966)は動詞群を「まとめる」特徴と「区別する」特徴によって分類した。著者はこれに従い、6種の意味が移動動詞の意味範疇をまとめ、区別する特徴であるとみなし、これまでに見て来た20動詞の交差分類表を作成している（論文中のpp. 120-121.）[場所を（出発地点）]が表中最初の5動詞を同一範疇にまとめる。また[場所に/へ（目的地点）]がこの中からたつを区別しながら、最後の3動詞と合わせて同一範疇にまとめる。同時に、[方向に/へ]との結合可能性が、これらの5動詞の中から出る、おりると第11-14動詞を区別する。[場所を（経由地点）]の特性が表中の第6-11、13-15動詞を同一範疇にまとめる。さらに、[場所まで]と結合可能であることが、これらの中から、いく、すすむ、、おりるを区別し、くるとまとめて同一範疇を形成する、等となっている。

## 第四章

これまでにみてきた移動動詞を、特徴的な意味をもつ「～して、…する。」（構文1）と「～すると、…する。」（構文2）の前半の文に埋め込むことで、さらにその意味を考察している。

構文1の用法を、奥田(1989)は「先行・後続」と呼び、前文の動作が「完結」し後続文の動作がその「結果」として行われると指摘した。一方、構文2の意味を、豊田

(1978) は「連続」と呼び、先行動作が状態変化という結果を残す場合には後続動作は一回性であり、先行動作が完了を表すなら後続動作は継続を表してもよく、両者は独立的でなければならないことを指摘した。構文 2 のもう一つの意味用法として、豊田は「発見」を表す例を指摘した。

著者は、構文 2 では前文が表す移動は完結しているが、その結果として後続事象が生じるというよりも、連続用法の場合には同一主語の動作が、さらには発見用法の場合には異なる主語の事象が、時間的に接していると解釈できると主張している。

豊田の「状態変化の結果が残る動詞」とは、奥田の「ふるまい動作」(姿勢、服装、携帯)を表す動詞に相当することに着目し、これらが動作としては完結しており、完結後の結果であるふるまい状態が後続動作と複合している場合には構文 1 に用いられ、前文の動作と後続文の動作が別事象の時間的連続である場合には構文 2 に用いられている、と著者は指摘している。すると、発見の意味は、その前文の動作が完結し、異なる主語の事象と時間的に接する場合に用いられる用法であることになる。

## 第五章

物を空間移動させることを表す動詞の語彙的意味、特に移動の始まり・実行・終わりを表す移動の意味構造と、その動詞の構文論的結合関係、特に目的語以外の名詞との結合関係との相関関係を考察している。構文論的結合関係による他動詞の語彙的意味の記述の今後の可能性を探っている。

移動を表す 6 他動詞は、以下のような多様な格形式の(格助詞付きの)名詞を取る。

[一を]+:「一に」おく(接着)                      [一を]+:[一から]はずす(分離)  
[一を]+:[一から]/[一に]いれる(包含)      [一を]+:[一から]/[一に]だす(排出)  
[一を]+:[一から]/[一に]/([一まで])もってくる(移動)  
[一を]+:[一から]/[一に]/([一まで])はこぶ(移動)

結合形式を降順にみると、移動の実態が、接着・分離から包含・排出へさらに全体的な移動へと移行するに従い、移動の道筋は、端点から経路へさらには閉経路としての空間へと間接化し、かつ結合可能な名詞の種類も増加する。

これらの関係を五章でみた奥田(1968-72)の「カテゴリー」と対比すると、以下のことがわかると筆者は述べている。おくが物の移動の終わりを示し、とりつけ動詞であること、はずすが物の移動の始めを示し、とりはずし動詞であること、もってくる、はこぶが移動(全体)を示し、うつしかえ動詞であることがわかる。物の、一定範囲の空間への包含を示すいれるはとりつけ動詞とうつしかえ動詞との中間的なものであり、排出を示すだすはとりはずし動詞とうつしかえ動詞との中間的なものであるといえる。

## 終章

自動的移動動詞の語彙的意味には、個別の格形式を持つ場所名詞との構文論的結合に

よってえられる意味と、特定方向への移動の意味と矛盾しない動詞（単独）の意味とがあることを指摘して、それらの構成する意味体系を提案した。さらに、特定構文に埋め込むことで明らかになる語彙的意味を考察した。最後に、提案した構文論的結合関係の有効性を他動的移動動詞で確認した。

## 【目次】

序章 移動動詞の語彙的意味について	5
0.1. 語の語彙的意味	5
0.2. 現代日本語の移動動詞の語彙的意味の記述	10
0.3. 本研究の目的と対象	11
第一章 現代日本語における場所名詞と移動動詞との結合	13
1.1. 場所名詞と移動動詞との構文論的結合関係	13
1.2. 特定の格形式における場所名詞との結合	19
1.3. 格形式間の相互関係	35
1.4. まとめ－特定の格形式における場所名詞との結合と移動動詞の特性	42
第二章 移動動詞の意味特性としての方向性	44
2.1. 方向を表す名詞（句）と移動動詞との結合	44
2.2. 移動動詞の語彙的意味の特性としての「方向性」－宮島（1972）から	49
2.3. 本章の目的	55
2.4. 上下の移動を示す動詞	56
2.5. 内外の移動を示す動詞	66
2.6. 方向名詞（句）と自由に結合しうる移動動詞	74
2.7. まとめ－方向名詞（句）との結合と移動動詞の特性	81
第三章 構文的特性からみた移動動詞の語彙体系	84
3.1. 構文論的結合関係から明らかになる移動動詞の語彙的意味の特性	84
3.2. 格形式「を」における場所名詞に出発地点の意味を与える動詞	92
3.3. 格形式「を」における場所名詞に経由地点の意味を与える動詞	104
3.4. 格形式「を」における場所名詞とともに用いられない動詞－『つく』『くる』	115
3.5. 部分的に重なり合う範疇の動詞－『でる』『はいる』『ぬける』『わたる』	117
3.6. まとめ－構文に基づく移動動詞の語彙的意味と語彙体系	119
第四章 移動動詞の「～して」／「～すると」	123
4.1. 経由性動詞の下位分類	123
4.2. 本章の目的	128
4.3. 出発性動詞の「～して」／「～すると」	129
4.4. 経由性動詞の「～して」／「～すると」	133

4.5. 到着性動詞の「～して」／「～すると」	135
4.11. まとめ－文中用法から明らかになる移動動詞の特性	137
<b>第五章 物の空間移動を示す他動詞の語彙的意味の特性</b>	<b>138</b>
5.1. 先行研究－奥田（1968-72）から	139
5.2. 結合可能な名詞（句）と動詞の語彙的意味の特性との関係	140
5.3. 物を移動させることを示す他動詞の特性－構文との相関関係	147
<b>終章 構文と語彙的意味</b>	<b>149</b>
<b>参考文献</b>	<b>152</b>
<b>用例出典</b>	<b>155</b>

## 論文審査結果の要旨

学位論文審査委員会は、当該論文の発表会を 2010 年 8 月 23 日（月）に公開で開催し、著者による発表を踏まえ、質疑を行い、論文内容を審査した。本論文における特徴的な研究上の方法、結論付けられた新たな知見・見解、また研究現況に与えるであろうインパクト等を挙げる。

### （論文の特徴）

背景：本論文は、奥田説とその解釈・批判者としての宮島説を出発点にして、動詞と格助詞が固有にもつ意味から動詞句全体の意味をどのように決定すべきであるかを、日本語移動動詞を素材にして丁寧に論考した力作である。個々の動詞が特定の格助詞を要求することの理論的解明の必要性は、フィルモアの格文法やアプレシヤンの結合価文法等により早くから指摘されていた。その後の生成文法や認知言語学等において、統語・意味的な枠組みで動詞の格支配が活発に議論されており、対照言語学や普遍文法の構築に貢献している。

独創性：本論文は、移動動詞が特定の格助詞を要求するとき、それが義務的に要求する格助詞（出発地点と経由地点のを、目的地点と到着地点のに）の他に、随意的に要求する格助詞（到達程度のみ、方向のに/へ）があることを豊富なデータで例証した。生成文法における厳密下位範疇化においてもその枠組みに修正を迫る可能性のある発見である。さらに、これらが、何故、数ある格助詞の中でも、他ならぬ、到達程度のみ、方向のに/へであるのか、その理由を移動概念の線分性に帰属させて説明している。移動に関わる個々の意味は、起点から着点までの線分全体の中から動詞毎にその意味に該当する部分が切り出される。しかし、到達程度のみ、方向のに/へは、移動過程の真の部分であるので、線分上には（たとえ直線や半直線の上でも）常に存在する。よって意味に矛盾がない限りは、移動動詞はこれらの格助詞を随意的に取ることができるのである。この着想は穏当で認知的にも妥当であり、達見である。移動を含めた（比喩的な）運動を意味役割で説明する、グルーバーやジャッケンドフのシート理論（意味役割理論）が知られているが、日本語のこれらのデータをシート理論を修正することで説明した論文を評者は未だ知らない。本論文の指摘は独創性をもつと思われる。

貢献可能性：本論文には移動自動詞の結合様式を決定するに十分な量とバラエティを備えた例文がデータとして引用されている。動詞語彙論研究に質の高い例文を供するという点でも本論文の公刊が期待される。

動詞が格助詞を支配し、その格助詞がさらに名詞句を支配する統語構造において、義務的な要素についてはこの構造に従って構成的な意味計算をすればひとまず十分で

ある。しかし先述の格助詞までとに/へは、それらと随意的な結合を許す移動動詞群に対して意味計算の統語的根拠を与えないので、両者間には意味的な制約しか成立しない。ここに概念構造の必要性を見出し、意味論（語用論）の微視的自律性を示している可能性があり興味深い。

著者が目下計画している移動他動詞論への展望が終章にのべられている。本研究は規模の大きな日本語全動詞の結合価研究への希望を抱かせてくれる。英語動詞語彙の詳細な研究としてレビンのよく知られたものがある。移動他動詞の研究においては、レビンの非能格性・非対格性概念やレイコフや柴谷の使役理論が有効に関連してくると思われ、本論文の提案する微視的な語彙の意味論によってこれらの理論に修正や拡張が生まれてくるのであれば、関連する学会にとっても有益である。

#### （今後の課題）

もたらされた結論は、上述の如く高く評価されるべきものである。しかし、さらに考慮すべき現象、残された問題、論証の妥当性、等があることも事実である。発表会で委員から出た質問、コメント等を集約すると、以下のようになる。

- 1) 本論文の引用する、奥田、宮島らに独特の「格形式」「文法的意味」等の用語の定義につき質疑応答があった。標準的な用語ではないが、理論内では整合していることを確認し、定義の明快な解説を行うように修正して頂いた。著者はむしろこの理論の標準化、深化とその応用を目指すとのことであった。
- 2) 自動詞と他動詞の交替の議論を考慮すべきではないかとの示唆があり、今回の自動詞研究を前提にした、著者の移動他動詞研究にはこの議論が組み込まれてゆくのが妥当であるとの方向性を確認した。
- 3) 例文用の文献に年代的なばらつきのあることが指摘されたが、電子コーパス内のみで必要な例文をえたためであった。注釈で用例の出典を説明することにした。

#### （結論）

本論文には、これらの問題点はあることも事実であるが、総体として見れば、今後、当該研究領域において、大きなインパクトを与える業績として認知されるであろうことが予想される。

以上のことから、本委員会は、本論文が学位論文の要件を満たしており、博士（学術）の学位を授与するにふさわしいものと判定した。